

キューピッドは未来から

一 謎の体験入学生

まだ蒸し暑さが残る、九月の初旬だった。

高校最後の夏をずっと図書館で過ごした私は、二学期初日の今日、朝の気だるさを吹き飛ばす勢いで、英単語を頭に叩き込んでいる。この単語一つを覚えるか覚えないかで、私の将来が決まるかもしれない。

「朝っぱらから、がつついて勉強しなくてもいいじゃん。受験までまだ半年もあるんだしさ」
親友の篠原美晴が、私の注意を単語帳から逸らそうと、わざわざ顔を覗き込んできた。

「美晴は推薦がほぼ決まってるから、そう言えるんだよ。私は違うから、余裕がないの。ほら、先生が来たよ」

単語帳から目を離さないまま美晴に忠告する。

担任の米沢先生は太っているからか、いつもドカドカと音を立てて教室に入ってくる。

単調な一日を予告する音に、美晴はしぶしぶ自分の席に戻っていった。

椅子を鳴らしながら、他の生徒たちも席に着く。やがて静かになって、いつもの淡々とした朝礼が始まる——はずだったけど、今朝は騒がしさが収まらなかった。

何かあったのだろうか。私はinsane（狂気の）という単語を頭の中で呟きながら、顔を上げた。教壇には米沢先生と共に、うちの高校の制服を着た見知らぬ女の子が立っていた。かなりの美少女だ。

栗色のショートボブ。すつと通った鼻筋。切れ長の目は、少し離れた私の席から見てもわかるほど、長い睫毛で縁取られている。

暑苦しく大柄な米沢先生の隣にいるからか、その美少女はとても清楚で華奢に見えた。

——似ている。

雰囲気は随分違うけど、教室の一番後ろの窓際の席に座っている、あの有名な彼に。

教室内が静まるのを待って、先生がもつたいぶるように咳払いをした。

「えー。体験入学生を紹介する。滝川優香君だ」

教室は再び騒がしくなった。

体験入学とは、短期間だけ学校生活を経験できるプログラムで、元々は海外からの短期留学生を受け入れるために作られた制度らしい。

でも、実際に体験入学生が来るなんて珍しい。しかも、半年後に受験を控えたこの時期に？ いったいどこから？ それに滝川という苗字。

当の美少女はざわめきに動じる様子もなく、誰かを探すように教室を見回していた。

私と目が合う。瞬間、美少女がぱつと顔を輝かせた……ような気がしたのだけど？

「静かにしろ」

早く終わらせたいのか、米沢先生の声が一オクターブ高くなった。

「滝川優香君は滝川の親戚だ。アメリカに住んでいるが、今回一時的に日本に滞在することになったそうだ。一ヶ月間だけこのクラスに所属する。では紹介はこのくらいにして、君の席は——」

と簡潔に終わらせようとした、そのとき——

「あ、あの」

美少女が米沢先生を遮った。

興奮しているのか、美少女の頬は赤く上気している。

「自己紹介してもいいですか？」

「まあ、したければ」

素っ気ない米沢先生の承諾に、滝川優香は再び私に顔を向けた。

誰が美少女の言葉を予想できただろうか？

形の良い唇を動かして紡いだ言葉は、あまりに奇想天外で突拍子もないものだった。

「未来から来ました。鈴木彩香と滝川優人の娘で、滝川優香と言います」

美少女は笑顔で爽やかに言い放った。

な、何のジョウダン？

私は受験勉強のしすぎで、耳がおかしくなったんじゃないだろうか。もしくは夏バテで幻聴を聞

いたのかもしれない。むしろそうであってほしい。

だって、鈴木彩香って、私じゃないの。しかも、滝川優人は——
窓際の一番後ろの席を振り向きかけたけど、なんとか思いとどまった。皆がチラチラと私を見て
いる。どうやら幻聴ではなかったようだ。

静まり返った教室に、チョークと黒板が擦れる音だけが響いていた。滝川優香が自分の名前を黒
板に書いているのだ。

「ハ、ハハ。いきなりでびっくりしたけど、君、面白いよ。いいねー」

呆気あっけに取られていた先生が、わざとらしく笑った。

その後、真顔に戻り、額に浮かんだ汗をハンカチで拭ぬぐう。

「優香の優は、父の優人から。優香の香は母の彩香からもらいました」

滝川優香の狂言は止まらない。そのうえ、

「ママ、はじめまして」

と私に手を振ってくる。

顔いっぱい笑みを広げた滝川優香に対して、私は固まるばかりだった。

ここまで来ると、冗談ではすまない。

皆の視線が、私に集まっているのを感じる。シャーペン握る手に汗が滲にじんだ。

「ハハ。自己紹介はそのくらいにして……。君の席は廊下側の一番後ろのあの席だ」

ようやく米沢先生が滝川優香を止めたときには、私はその場に座っているのが精一杯だった。

「えー。今日は連絡事項が二つある。一つは——」

滝川優香が席に着くと、努めて何もなかったように、米沢先生が朝礼を始めた。

私の学年には、特殊な生徒が何人かいる。そのうちの一人が、滝川優人だ。

大手企業の社長の長男で、成績は常に学年トップ。さらに容姿端麗ときているから、できすぎて
いる。

雲の上の人という雰囲気常に漂わせ、一般庶民とは口をきかない。

さらに滝川優人には、永嶋祐美ながしまゆみという彼女がいる。

永嶋祐美は、裏世界を牛耳ぎゅうりゅうじっていると噂されるヤクザの娘だ。

滝川優人と永嶋祐美は、中学の頃から付き合っているらしく、滝川優人は既に永嶋組に婿入りむこいりが
決まっている、という噂もある。

高校に入学して早々、滝川優人に想いを寄せていたある女子生徒が、大怪我をするという事件が
起こった。その背後には永嶋組の組員が絡んでいるとかいらないとか。真実はうやむやなままだ。

この他にも二、三、似たような話がある。

とにかく、永嶋祐美が朝礼に居合わせなかったのは、不幸中の幸いだった。

変わり者の父がいること以外は、見かけも家柄もごく普通の私。

有名な彼らと同じクラスだけど、特別関わることもなく、平穩に高校生活を終えたいのだ。

「ママ」

休み時間になると、滝川優香は待ち構えていたように、私の席にやってきた。クラス全員の目が、私と滝川優香に注がれる。逃げ出したくなる気持ちを抑えて、私は滝川優香と向き合った。

こんな馬鹿げた冗談は、早く終わらせなければならぬ。

「何の冗談か知らないけど、やめてくれる？ 全然面白くないし」

私はきつく言い放った。

無邪気な光を湛えていた滝川優香の目が、怯えるように動いた。周りから「オオツ」というどよめき上がる。一瞬、罪悪感を覚えたけど、こっちは生死が懸かっている。

「迷惑なの」

冷たく言ったのに、滝川優香は顔を強張らせながらも、立ち去ろうとしない。

「何だよ。かわいそうじゃん。もっと優しくしてやれよ」

いきなり、高倉翔が口出しした。

高倉君は滝川優人の親友で、いつも永嶋祐美を含めた三人でつるんでいる。母親は女優、父親は有名な映画監督という芸能一家に育った彼は、背が高く、母親譲りの派手な顔立ちをしていた。

この状況を面白がっているのだろう、口の端が上がっている。

「なーそう思うよな？ 優人？」

そして、事もあろうに、いきなり滝川優人に話を振った。

クラスの間が一斉に滝川優人に移る。

彼は自分の席で、長い足を投げ出すようにして座っていた。

逆光で表情がよく見えないけど、私を見ている。恥ずかしさが一気に込み上げた。でも、すぐに興味なさそうに視線を逸らされた。

「つれないな。優人パパは。それにしても、優香ちゃんはパパにそっくりだな。髪の毛の色とか小柄なところは、鈴木さんに似てるけど」

「よくそう言われるの」

高倉君にポンポンと頭を叩かれた滝川優香は、私を気にしながらもほにかむ。

「ちよ、ちよつとやめてよ。そういうこと言うの」

私の顔は熟したトマトより、真っ赤になっているに違いない。

「そーだよ。やめなよ、高倉君。そういうのは火に油を注ぐって言うんだよ」
美晴も加勢してくれた。そのとき――

「翔、その子誰？」

背後から声が出た。

透明感のある凛とした声。場の空気を瞬時に変える存在感。

振り向くと、永嶋祐美が教室の入り口に立っていた。

艶やかなストレートの黒髪を肩に流し、高校生でありながら、赤いルージュが似合いそうな顔立ちをしている。彼女の大きな瞳が、高倉君から滝川優香へと動き、ついに私へと向けられた。

恐れていた状況になってしまい、全身の血がサーと引いていく。

どこからか、「修羅場だよ」という囁きが聞こえてきた。

「この子はさ、優人と鈴木さんの——」

「わ、私、気分が悪くなったから早退するね。先生にそう言っておいて」

高倉君の説明を遮るように言うと、私は空の鞆を引つ掴み、ダッシュでその場から逃げ出した。

十

その日の午後、美晴が私の教科書を持って家を訪ねてきてくれた。

あの後、高倉君から話を聞いた永嶋祐美は特に怒るわけでもなく、無反応だったらしい。

私の取り越し苦労だった。確かに、あんな冗談を本気にするわけがない。

滝川優香がどうしてあんな発言をしたのかは理解に苦しむところだけど、世の中にはいろんな人がいるんだから、虚言癖がある人も一人や二人いるってことだろう。

そうやって、私の中では解決したつもりだったんだけど——

事はそれだけでは終わらなかった。

どういうわけか、私は今、滝川家の日本庭園を臨む和室で、父と並んで正座をしている。

私の向かいには、滝川優人が、その横には彼の父親がいる。

滝川優人は、Tシャツにジーンズという服装で、片膝を立てて不機嫌そうに座っていた。

彼は常にこんな感じだけど、学校にいるときはクールに見えるその仕草も、滝川父の横では、ふてくされているように見えるところが面白い。滝川優人も人の子なんだ、と当たり前のことを思う。多分、考えていたことが顔に出たのだろう、滝川優人に射抜くように睨まれた。

——この人、苦手だ。

「ま、楽にしてください」

滝川父が、ビールを私の父のグラスに注ぐ。

「では、お言葉に甘えて」

私の父は足を崩すどころか、ネクタイまで緩めた。

そんな父の横で、私はお刺身を掴む。トロリとした食感で美味しい。

正面に滝川優人がいなければ、もっと美味しく食べられるのだけど。

それよりクラスメイトでありながら、ほとんど話したことがないのに、このシチュエーションって何？

夕方、珍しく早く帰ってきた父に、知り合いの家に行くから一緒に行こうと誘われ、付いてきたのだけど……まさか滝川優人の家だとは思ってもみなかった。しかも、滝川父は私を見るなり、「可愛いお嬢さんだ。うちの優人は目が高い」

とか何とかお世辞を言ってきた。そのときは聞き流したけど、なんだか嫌な予感がする。

「いや、優香が突然うちに現れたときは驚いたねえ。しかも、未来から来たと言うし」

ビールを飲んで一服した後、滝川父が切り出した。

「ま、ありえないことではないですがね」

私の父が得意気に答える。

もしかして、滝川優香のことを言っている？

そういえば米沢先生は、滝川優香が滝川優人の親戚だと言っていた。

「あの、滝川優香さんが、えーと滝川……滝川君の親戚だと聞いたんですが……」

同じ姓の滝川父の前で、彼を滝川君と呼ぶのは奇妙な気がしながらも、私は質問してみた。

「なんだ、お前。学校で優香から聞かなかったのか？」

父が驚いたように聞いてくる。

父にはまだ学校を早退したことを伝えていなかった。理由を言うのが嫌だったから。

それにしても、優香なんて呼んで、まるで滝川優香を知ってるような……

「優人、お前も教えてあげろよ。彩香ちゃんはお前の未来の——」

「あーっ！」

居たたまれなくなつて、思わず叫んでしまった。滝川優人を含む全員が、私を見る。

「す、すみません。事情をわかりやすく教えてくれませんか？」

顔が燃えてるんじゃないかと思うほどの熱さを感じながら、滝川父に頼んだ。

つまり、こういうことらしい。

滝川優香が突如、滝川家の庭に変なマシンで現れた。そして、自分はタイムマシンで未来から来た、母に会わせてほしいと言ってきたそうだ。

滝川家には代々受け継がれている家宝の刀があつて、滝川優香は、それを証拠として持ってきたらしい。鑑定した結果、滝川家に飾られている宝刀と全く同じものだった。

それによつて、滝川優香の話が真実であると確信した滝川父は、彼女から母親の名前を聞き、私の父に連絡。

私の父は、国立大学の航空宇宙工学科の教授で、「タイムマシンを創る会」という怪しいサークルを創設するほど、タイムマシンに執着している。

そんなわけだから、未来で自分がタイムマシンを開発した、という話を、当たり前のように信じた。そして、滝川優香を私のクラスに送り込み、母と娘の劇的な対面を目論んだと言ふ。

いかにも、エキセントリックな父が考えそうなことだ。

「優香を彩香のクラスに体験入学させたいと佐々木に頼んだら、即OKしてくれたんだ。アイツも変わらん。相変わらず話がわかる」

父がご飯を頬張りながら言う。

佐々木とは、うちの高校の理事長のことだ。父の古い友人で、今は飲み仲間になっている。

「ただ問題があつてねえ。実は優香は、彼女の時代から見て、十年前に行く予定だったらしい。それが、タイムポッドの不備で、二十年前の過去に来てしまったんだ。つまり、目標の年代より、十年も前の過去に来てしまったわけだ」

「そうなんですか」

天ぶらを箸で摘みながら、私は滝川父に相槌を打った。

ちなみにタイムポッドとは、父が未来で発明したタイムマシンの名称だそうだ。

滝川父は、前髪に白髪がメッシュのように入っていて、中年にしては体格が良く、しなびた茄子のような私の父とは、風格が全然違う。でも、妄想レベルは私の父と同じだ。

いくら家宝と同じものを持ってきたからって、タイムマシンなんか普通、信じていい話じゃない。「聞くと、タイムポッドはまだテスト段階だったそうじゃないか。なぜそんな危険を冒してまで過去の君に会いに来たのか。優香は教えてくれないんだが、とにかく、タイムポッドの不備で、優香は元の時代に帰れなくなっただ」

「目標の年代に十年分の誤差を足してタイムマシ……タイムポッドに設定すればいいのでは？」

難しそうに言う滝川父に、私はお刺身をお醤油につけながら軽く助言してみた。

そもそも真面目に考える話じゃない。

「いや、彩香。これはそんな簡単な話じゃない。タイムポッドは、ワームホールに乗り込んで、時間移動をするという代物だ。これはまだ推測に過ぎないが、もしかすると、時間の歪みが予想以上に干渉しているのかもしれない。そうであれば、時間の歪みによる誤差を減少させる制御システムを強化する必要がある。今回は十年の誤差だったからよかつたものの、下手をすれば何百年、何千年という誤差が出ないとも限らない。検証が必要だ」

タイムマシン専門家を自称する父が、もつともらしい説明をする。

父のこの手の話は、いつ聞いてもさっぱりわからない。そもそもワームホールって何？

文系の私は「ふーん」と納得するふりをしながら、フワフワの茶碗蒸しを口にした。

中年二人の妄想に付き合うのは馬鹿馬鹿しいけど、料理は美味しい。

料亭のような味に感動しながら顔を上げると、滝川優人と目が合ってしまった。

人を一瞬で惹きつける、切れ長の目……

時が止まったような錯覚に襲われる。ぼんやりと見入っていた私を、父の笑い声が現実に戻す。慌てて目を逸らした。

考えてみると、滝川優人は随分前から、事情を知っていたことになる。彼が何を考えているのかわからないけど、このやる気のない態度を見れば、これらの話を信じてないことがわかった。もしかすると、今日、永嶋祐美が冷静だったのは、滝川優人から事前に話を聞いていたからかもしれない。とにかく私は永嶋祐美に注意しなければいけない。

「それで、彩香。滝川さんがこの敷地内でタイムポッドを修理することを提案してくれた。そのお申し出を受けようと思う。修理するには、優香の助けもいるしな。まだ十四歳だというのに、あの子の知識はすばらしい。天才だよ。さすが私の血を引いている」

父が顔をほころばせた。一人悦に入っている父が恥ずかしい……

いや、それより、十四歳ってどういうこと？

「彼女は私と同じ年じゃ——」

「いや。彼女はまだ十四歳だ。未来では飛び級を繰り返して、既に大学生だったらしい。だから君

たちのクラスに入れたんだよ。どうせこの時代に身分を証明するものなどないのだから、年齢を偽ってもバレないだろうと思ってるねえ」

滝川父が、悦に入ったままの父に代わって答えてくれた。

私は納得した。あの突拍子もない言動。確かに、あれは高校生のものじゃない。十四歳でも幼いくらいだ。

見かけにもまだあどけなさが残っている。タイムポッドの話は信じられないけど、滝川優香が十四歳だという話は納得がいった。

私は、滝川優香の傷ついた表情を思い出した。あんな言い方をしなくてもよかったかもしれない。父がそうだからわかるけど、幻想の中に生きる人は周りから何を言われようが、現実を理解することはない。彼らにとっては幻想こそが真実だから。

それならこつちも何も言わずに合わせてやる方がいい。

「それで今、優香ちゃんはどこにいるんですか？」

私は滝川父に聞いた。

「彼女は二階にいるよ。なんだか今日は元気がなかったな」

「じゃあ、私、彼女に会いに行つて——」

「まあ、彩香。待ちなさい。まだ話は終わっていない」

立ち上がるうとした私を、父が止めた。

「タイムポッドをここで修理することになったんだが、大学での仕事もあるし、正直うちから通う

のはきつこ」

私の顔は父に向けられているけど、意識は滝川優人に向いていた。先ほどから滝川優人の冷たい視線を痛いほど感じている。

その視線の理由を、次の父の言葉で知ることになる。

「だからこの家にしばらく滞在することにした。もちろんお前もだ。優香と絆きずなを深めるのにもちようどいい。それに、優人君ともな。明日、荷物をここに運ぶから、今夜荷造りをしておきなさい」父の言葉を聞きながら、私は自分が奈落の底へと沈んでいくのを感じていた。

十

次の日は、永嶋祐美が気になってしょうがなかった。

気が付くと、私の目は永嶋祐美を追っている。

「彩つてばまた見てる。レズッ気があるんじゃないかって、変に誤解されるよ？」

美晴が親切にも注意してくれた。

「うん。そうだよ」と答えながらも、私の目は再び永嶋祐美に戻る。

昼食後の気だるい昼休み。

永嶋祐美はいつものように、滝川優人と高倉君の三人で話をしている。

滝川優人が私の視線に気付いたのか、こちらを見た。慌そてて目を逸らす。

「別に何も反応ないし、彩のことなんとも思っていないだよ。よかったじゃない？」
そうなんだけど、その反応のなさがかえって気になる。

私が滝川家に滞在することは知っているはずだ。滝川優人との関係を疑われるぐらいなら、レズだと思われた方が都合がいいんだけど……

昨日は夜遅くまで、滝川家滞在について父と喧嘩をしていた。

私の母は三年前に亡くなっている。私は一人っ子で、兄弟はいない。

一人で家に残ると言い張る私に、父が猛反対し、結局逆らえなかった。

普段は妄想ばかりしている父も、怒ると怖い。

「それより例のあの子、ずっと彩のこと見てるよ」

美晴が後ろを指差した。

振り向くと、滝川優香が教室の片隅で、一人ポツンと座っていた。

そういえば、滝川家滞在のことはいっぱいいっぱいで、滝川優香のことは頭から消えていた。

優香は、まるで捨てられた仔犬のような目で私を見ている。ズキッと胸が痛んだ。

「ちよっと行ってくる」

美晴に断って、私は席を立った。

「……昨日はごめんね。キツイこと言って」

優香に近づくと、私は小声で謝った。

優香の顔が、今にも泣き出しそうに歪む。それを誤魔化すように、優香は頭を振った。

「優香もごめんなさい。昨日はマ……じゃなくて、彩香さんに会えて、浮かれちゃったの」

昨日のぶっ飛んだ様子とは打って変わって、優香は言葉を選びつつゆっくりと言った。

それに安心した私は、彼女の隣の席に座る。

「未来では大学生なんだってね」

途端に、優香の顔がパツと明るくなった。

「どこの大学？」

「おじいちゃんと同じ大学。専攻も航空宇宙工学なの」

優香が舌足らずな甘い声で答えた。

「そうなんだ」

私の何気ない一言にも、優香は笑顔を見せる。その健気さがとても可愛い。

優香の無邪気な様子に、私は自然と未来の話を信じているふりをしていた。

混じり気のない好意にこそばゆさを感じ、視線を落とす。ふと優香の机に置かれた携帯が目に入った。

真新しい携帯に不釣り合いな古いストラップ。Aの文字を模ったそれは、メッキが剥がれている。

「ママのものだったの」

私の視線に気付いて、優香が言った。

自分のイニシャルがAだという事実、私は言葉に詰まった。

ちょうどそのとき、授業開始のチャイムが鳴った。皆が慌ただしく席に戻る中、滝川優人はまだ

高倉君と話している。

古いストラップとタイムポッドと優香。

それらに引っかかりを感じながらも、その日、私は父と共に滝川家へ移った。

二 滝川家

今朝は目覚めがすっきりしなかった。

顔を洗った後、肩まである髪をまとめて寝癖を誤魔化す。

洗面所を出て「優香」と表示されたドアの前を通りすぎ、廊下の突き当たりの部屋に戻った。

朝日に照らされた白壁が眩しい。

服を着替えると、階段を下りて、ベーコンが焼ける匂いがする一階へと向かった。

滝川家に来て五日になる。

モダンな造りのリビングルームでは、滝川優人と弟の隼人君が、朝食を摂っていた。

「はよ。彩ちゃんて、朝苦手なんだ」

だるさを堪えて挨拶した私に、朝から爽やかに隼人君が笑った。もちろん、滝川優人から挨拶は返ってこない。

一つ年下で同じ高校のサッカー部のアイドルである隼人君は、無愛想な兄と正反対で愛嬌がある。

「日曜日だし、もつとゆつくり寝ていてもよかったのに。昨夜も遅くまで勉強してたんでしょ？」

隼人君の向かいに座ると、隼人君の母親である小夜子さんが、私の朝食を運んできてくれた。

「あつすみません」

私は慌てて立ち上がり、残りの朝食を運ぼうとする。

母が亡くなってから、家事は私の仕事だったので、何もしないのは落ち着かない。

でも、「いいのよ。そんなこと」と柔らかな笑顔で断られた。

小夜子さんは決して美人ではないけれど、癒し系というか場を和やかにする雰囲気を持っている。

「優香とうちの父さんは？」

「実験室に行ってる。俺が起きたときには、もう出かけてた。日曜だつてのに頑張るよな」

隼人君が言いながら、トーストをかじった。

「父さん、仕事を趣味と勘違いしてるから。優香をこき使わないといいんだけど」

私はそう言つて、目玉焼きを口に運んだ。

私の話し相手は、たいいてい優香か隼人君だ。同じ家にいるけど、滝川優人とはまだ一言も言葉を交わしたことがない。これはある意味すごいことだ。

しばらくして、朝食を終えた滝川優人が立ち上がった。

「お昼はどうするの？」

小夜子さんが遠慮がちに、彼に聞く。

「外で食べる」

素っ気なく答えた彼に、小夜子さんは「そう」と小さく呟いた。

小夜子さんは隼人君の実母ではあるけれど、滝川優人と血の繋がりは無い。滝川父は滝川優人の実母と離婚して、小夜子さんと一緒になった。

うちの高校では、この異母兄弟はあらゆる意味で注目されている。

学年は違うけど、二人の誕生日は八ヶ月しか違わない、と噂好きの友達が言っていた。つまり、滝川優人が生まれたとき、小夜子さんは既に妊娠していたことになる。

第三者の私から見ても、滝川優人と小夜子さんの関係は微妙だ。どこか他人行儀で、どこちない。複雑な家庭環境だから、滝川優人はああいう他人を拒絶するような雰囲気があるのかもしれない。赤の他人である私には、関係のないことだけだ。

朝食の片付けを手伝った後、私はコーヒを片手に、図書室に向かった。

なんと滝川家には、図書室と呼ばれる広い書庫があるのだ。

図書室に入ると、本の香りにフワッと包まれた。壁という壁が本で埋め尽くされた部屋の中央には、本を思いっきり広げられる大きな机と座り心地のいい椅子がある。

私はその椅子に座ると、さっそく志望校の赤本に取りかかった。

大きなアンティークの古時計が、カチコチと時の流れを知らせる。

ここで勉強すると、集中度がまるで違った。

実を言うと、私は滝川家での生活を満喫している。

家事はしなくていいし、小夜子さんの料理はとても美味しい。家も豪華で、まるでホテル暮らしをしているようだ。他人と暮らすのは気を使うけど、滝川家の人々は、いい人ばかりで苦にならない。優香も妹みたいで可愛い。時々、嫁扱いされるのは困るけど、滝川優人とは特に関わる必要はないし、永嶋祐美も別に気にしてないようだ。

いつの間にか、この状態が続けばいい、と思っている私があった。

「彩香ちゃん。お友達が来たわよ」

センター試験の過去問に頭を悩ませていると、小夜子さんの声と共に美晴が入ってきた。

美晴は胸元まで深く開いた、Vネックのセクシーなワンピースを着ている。

「似合うかな？ これ、先週買ったばかりなんだ」

美晴が両手でスカートを広げてみせた。

髪がベリーショートで、背が高めな美晴を、ミニのワンピースがフェミニンに見せていた。

「似合うけど、勉強しに来てるのにキメすぎだよ」

花柄プリントのTシャツにデニムのミニスカート、という格好の私はあきれた。

一緒に勉強するという名目でやってきた美晴の真の目的は、実験室にいる黒田先輩だ。

黒田先輩は父の研究室に所属している院生で、「タイムマシンを創る会」のリーダーをしている。

オタク系のサークルには勿体ないほど端整な顔立ちで、ファッションセンスも悪くない。美晴と張り合う気はないけど、黒田先輩は私の気になる人ランキングでも上位に入る。

早速、数学でわからない問題を教えてもらうという理由で、私たちは黒田先輩のいる実験室へ遊びに行った。

実験室というのは、滝川家の和風の庭に、不自然な感じで立っているプレハブのことだ。簡素な外観とは裏腹に、内部はコンピュータが何台も並ぶハイテクな空間になっている。これらの備品は、滝川父がスポンサーになって集めたらしい。

その実験室の中央にあるのが、「タイムポッド」だ。

幅三メートル、高さ五メートル。円形の窓が取り付けられたメタリックな円柱の物体は、サイドを太陽電池パネルのようなもので挟まれ、それなりにSFっぽい雰囲気を出している。

「外側は整っているけど、中は未完のままなんだ」

黒田先輩が正面のスイッチを押すと、ウイーンと音を立てて、上部の蓋が開いた。

上からハシゴで中に入ると、狭い個室の中はケーブルが入り乱れていた。

壁にはいくつものモニターがあり、中央に操縦席らしき椅子が二つ並んでいる。

「操縦は音声による操作と、タイムポッド内にあるこのコンピュータによる操作の二通りの方法がある。音声操作は意外とシンプルで、三つのパスワードを言うだけで、タイムポッドを発進できるようになっているんだ。操作方法はこのマニュアルに全て書かれている」

マニュアルと書かれた冊子を黒田先輩が手に取った拍子に、メモ用紙がヒラリと落ちてきた。

それを美晴が拾う。

「パスワード……」

美晴が何気なくメモを読み始める。

途端に、モニターが起動する。

そこには例のパスワードが書かれてたらしい。

「あー美晴ちゃん！ パスワードを言っちゃだめだよ」

黒田先輩はヒヤツとした顔で叫ぶと、慌ててタッチ操作で、コンピュータを停止させた。

タイムマシンにしては、あまりにも無防備だし、そもそも簡単すぎる操作が胡散臭い。

そのとき、優香がタイムポッドに入ってきて、私の横にくっついた。

「タイムポッドの修理は進んでる？」

私は優香に話しかけた。

「あまり進んでない。おじいちゃんは、まず数値シミュレーションをおこなって検証しなければいけないって言うの。だから今は、タイムポッドをモデル化して、プログラミングをしている状態なんだ」

「大変そうだね」

モデル化が何かはわからなかったけど、私はいつものように相槌あいづちを打った。

「プログラミングは優香ちゃんがしているんだ。タイムポッドのアルゴリズムは超M理論をベースにしているんだけど、僕は現代のM理論も理解できていないからね」

黒田先輩が横から説明した。

先ほどの失態を挽回しようとして、美晴がわざとらしく大きく頷く。そして、

「M理論って何ですか？」

と大真面目に質問した。

「M理論はなんでも、五つの超ひも理論を統合したもので……えーと……」

黒田先輩が考え込むように、額に手を当てる。優香が後を続けた。

「超ひも理論は、素粒子はひもが振動することで、表現されているという理論なの。M理論は、宇宙が十次元の空間と一次元の時間から成っていると、五種類の超ひも理論を——」

舌足らずな口調で長々と説明された理論は、全くわからなかった。

「——とここでさ。私、未来では何してんの？ 彩とはまだ仲良いんでしょ？」

話についていけなかった美晴が、唐突に話題を変える。

「えっと……。美晴さんはね、未来ではベストセラー作家なんだ」

間があつた後、優香が答えた。なんだかたつた今、話を作つたつばい。

「えー？ そうなの？ 私、小説なんて書いたことないんだけど？」

「うん。社会人になつて、突然書き始めたんだって」

優香があっけらかんと言う。

どうでもいいけど、未来のことって、普通バラしちゃ駄目なんじゃないの？

未来から来たと自称しているわりに、歴史を変えてはいけなとかいう思いは、頭にないらしい。

「そーなんだ。でも確かに私って想像力があるかも。実は文章力にも自信があるんだよね」

その気になる美晴。なんだか占いっぽくて面白い。だから私も聞いてみた。

「私は未来では何になつてる？ 滝川優人のことは抜きにして」

なぜか、優香の顔が緊張したように見えた。

「彩香さんはね。……主婦」

返ってきた優香の答えに、ショックを受けた。

主婦？ 私が主婦？

「それは、絶対ない」

私は言い切つた。だって私は——

「私は法学部に行つて、将来は弁護士になるんだから」

ついムキになつて反論してしまつた。

キャリアアウーマンになるために、必死で受験勉強をしているのにあんまりだ。

「ママは法学部には合格するの。でも卒業して、パパと結婚して、優香を産んじゃつたから」

それって、できちゃつた結婚ってこと？

理想と随分かけ離れた話に、気分を害された。ムカつきが顔に出ているらしい。優香が不安げに

私を見ていた。その表情にハツとする。

「ありがと。教えてくれて」

無理やり笑みを作つた。それを見て、優香も笑顔になる。

でも私の中で、タイムボツドに対する不信任は、ますます高まつていった。

その晩、いつものように夕食を滝川家の人々と食べると、私はお風呂に入った。和風建築でありながら、洋風の間取りを取り入れたこの家には、やたらとバスルームが多い。一階と二階にお風呂があるうえに、滝川夫妻の寝室、隼人君、さらには滝川優人の部屋にもバスルームがある。

一階の檜風呂ひのみにゆつくり浸かると、受験勉強で骨の髄ずいまで疲れた体が癒いやされた。新月の、暗い夜だった。

お風呂から上がり、縁側を外を眺める。すると突如、猫の鳴き声が響き、私を飛び上がらせた。生なまめ温い風が吹き、柳の木が揺れる。

背筋がヒヤツとし、私は慌てて自分の部屋へと引き返した。

優香の部屋の前まで来たとき――

「――誰から聞いた？」

滝川優人の深くて低い声でした。

珍しく、滝川優人が優香と話をしているらしい。

優香の部屋のドアは、大きく開け放たれていた。

「だから、未来の優人からだってば」

優香が反抗的な口調で答えている。

私には顔色を窺うかがうようなところがあるのに、優香は滝川優人に対しては強気だ。

「優人」と呼び捨てにして、無視されてもめげずに話しかけている。

最近では滝川優人もあきらめたのか、時折、彼から優香に話しかけたりもしているようだ。

「そんなはず――」

滝川優人が吐き捨てるように何かを言いかけ、止めた。

よくわからないけど、取り込んでいるらしい。

「優香が十年前の過去に行こうとしたのは……」

私はそっと部屋の前を通りすぎようとしたのだけれど――

「あっ、彩香さん」

優香がぎよつとしたような声を上げた。

さすがに無視できず、私は足を止めて優香の方を見る。

優香は椅子に座り、滝川優人は壁に寄りかかって立っていた。

「優香、今日は遅かったんだね」

滝川優人の視線を意識しながら、私は優香に向かって当たり障りのないことを言った。

「プログラムにバグがあって、デバッグしてたの。彩香さん、お風呂に入ってたんだ」

「う、うん」

滝川優人の視線は相変わらず、私に向けられている。私はぎこちなく頷うなづいた。

「優香も入ろうかな。彩香さんと一緒に入りたかったあ」

「今度ね」

話を終わらせようと思い、私は短く答える。
今、お風呂の話はしたくない気がする。

パジャマだし、髪も濡れてるし、滝川優人が私を見てるし……
ザワツと胸が騒ぐ。

「おやすみ」と言うと、私は足早にその場を去った。

三 視線

また、視線を感じる。

滝川優人だ。見なくてもわかる。

あの日——優香の部屋で二人が話しているのを見たとき——から、数日が経つ。
あれ以来、滝川優人はやけに私を観察するようになり、私は彼の視線を敏感に感じ取るようになった。

彼の視線にうっかり振り向いたりしないよう、私は細心の注意を払っている。

先日、滝川優人の隣にいた永嶋祐美と目が合ってしまったからだ。

それにしても、観察されるとするのは気持ちが良いものではない。人をジーンと見るのは失礼だと、親から教わらなかったのだろうか？

でも、気にしたところでどうしようもない。

気を取り直してお弁当を開けると、今日はちらし寿司だった。

「すごっ。今日も凝ってるね」

美晴がうらやましがる。

パートで料理学校の講師を務める小夜子さんが作るお弁当は、いつも私を感動させてやまない。
「彩香さん、優香の椎茸食べてくれる？ 椎茸嫌いなよ」

優香が椎茸を一つ一つ箸で摘んで、私のお弁当に載せた。

どこからか、クスクス笑う声が聞こえてきて、優香が顔を俯かせる。私と優香のことを噂して、クラスの子が笑っているのだろう。最近よく、こういう場面に出くわす。

体験入学して早々、爆弾発言した優香は、クラスで浮いている。

優香を擁護するように行動を共にする私もまた……

「気にすることないよ」

美晴が優香と私を気遣ってくれた。

「全然気にしてないし」

平静を装ったけど、急に小夜子さんのお弁当が味気ないものになった。

蘇ってしまった。思い出したくもない、いじめられたつらい過去が。

「ちよっと外の空気吸ってくる」

お弁当箱を片付けると、私は席を立った。優香も付いてこようとしたけれど、

「一人で風に当たりたいの」と、詩人のようなことを言って断ってしまった。私だって一人になりたいときがある。

一人になったはいいものの、屋上に出たら、ものの数分で一人でいることに飽きてしまった。とはいえ、すぐに教室に戻るのも格好悪い。とりあえず屋上を離れると、私はトイレに向かった。洗面所では四、五人の女の子が鏡に向かっていた。私に気付いた途端、彼女たちは目配せをし合ってクスツと笑う。

胃にドシツと、石を投げ込まれたような感覚を覚えた。

気にしないふりをして、彼女たちの背後を通りすぎようとする。

「コブ付きじゃないんだ。めずらしー」

そのうちの一人が言った。私を横目で見て、ニヤツと笑っている。

目が釣り上がった、いかにも意地悪そうな顔には見覚えがある。

早瀬ルミという、私の学年で幅を利かせている女子生徒だ。

去年、ある女子生徒を登校拒否に追い込んだと噂されている。

何を言われても無視すればいい。わかっていたはずなのに――

「……どういう意味？」

気が付いたときには、聞き返していた。

「聞こえちゃった？ 未来から来たなんて勘違いしてる子と、今日は一緒じゃないんだって言ったんだけど？」

早瀬ルミが、釣り上がった目をさらに釣り上げて私を見下ろす。

新たな標的を見つけたとでもいうような、陰湿な笑みを浮かべていた。

優香のことを悪く言われて、頭にカーツと血が上った。

「高校生で親子ごっこなんかしてキモイし」

早瀬ルミは声を大きくして、さらに言う。まるで誰かに聞かせるように。

「親子ごっこなんか……」

私の口から掠れた声が発せられる。

認めたくないけど、私は動揺しているらしい。

言い返してやりたいのに、言葉が見つからなかった。

何も言えないまま精一杯睨み返していると――背後で水を流す音がした。

ギイという音とともにドアが開いて、誰かが個室から出てくる。

「今の言葉、もう一度言ってもらえるかしら」

この声は――

振り向くと、永嶋祐美が立っていた。

窓から差し込む光の中で、聖母のごとく微笑んでいる。

彼女の登場に、私はごくくと唾を呑んだ。額に冷たい汗が滲み出る。

来るべき時が来た。私はここで永嶋祐美と早瀬ルミたちにいじめられるのだ。

「高校生で親子ごっこして、キモイって言ってやったんです」

早瀬ルミが媚びるように言う。永嶋祐美に取り入ろうとしているらしい。次の瞬間――
ダンッという音がしたかと思うと、早瀬ルミは壁に押さえつけられていた。

一瞬、何が起こったのかわからなかった。

永嶋祐美は早瀬ルミの顔を片手で鷲づかみにすると、無理やり上を向かせた。

「もう一度、言ってごらんなさいよ？」

早瀬ルミは頬が變形するほど強く顎を掴まれている、何も言えない。ただ、うめき声だけが漏れた。

永嶋祐美は顔を上に反らし、目線だけを下に向けている。

その表情に、背筋がゾクツとした。

格が違う。

すごい。

普通の高校生ではないと思っただけど、ここまですごいとは思わなかった。

早瀬ルミを押さえつける瞬間なんて、影がさつと動いたようにしか見えなかったし。

何より驚いたのは――

永嶋祐美が私を助けてる？ うざい存在であるはずの私を？

しばらく、誰も口をきかなかった。廊下ではしゃぐ生徒たちの声だけが、不自然に響き渡る。

不意に永嶋祐美が手を離れた。早瀬ルミがヘタツと床に崩れ落ちる。

それまで固まっていた取り巻きたちが我に返り、早瀬ルミを引きずるようにして逃げていった。

永嶋祐美と私だけがトイレに残される。

「あ……ありがと」

私は彼女を直視できないまま言った。畏敬の念すら覚える。

手を洗っていた永嶋祐美が、蛇口をキュッと止める。そしてマジマジと私を見つめた。

気まずい。というか、何かがオカシイ。

「もう行かなきゃ……」

「放課後、何か予定ある？」

ドアへ向かって歩き出した私を、涼やかな声が止める。

永嶋祐美が私に話しかけていた。

「美容院に行くの、付き合ってくれるかしら？」

永嶋祐美は肩にかかった髪をサラッと後ろに流した。

永嶋祐美に誘われてる？ 美容院に？

意外な展開に、私の頭はついていけない。この場合はどうしたら？

「う、うん」

断る理由も思いつかず、つい承諾してしまった。

放課後、私は永嶋祐美と一緒に、洒落た美容院にいた。

大きな鏡の前に座らされた私の顔を、綺麗な美容師のお兄さんがあらゆる角度に動かす。

「悪くない顔だけど、地味ね」

私の顔を分析した後、美容師のお兄さんがお姉系の言葉で結論を出す。

自覚していることだけど、他人に言われたくない。

「そうでしょ」

永嶋祐美にまで言われる。ほっといてほしい。

「地味系の顔なら、もっと髪型で華やかさを出さないと駄目よ」

美容師のお兄さんが私の髪をクシャツと掴んだ。

「ここはもつとこういう風に……」

永嶋祐美は「任せたわ」と言うと、さつさと近くのソファに座って、雑誌を読み始めた。

私はわけがわからない状態で、美容師のお兄さんにされるがままになっていた。

永嶋祐美は謎だ。

鏡に映る彼女を、横目で見ながら思った。

私に嫉妬している気配は微塵みじんもない。それどころか、私を磨き上げようとしてる？

これが極道のやり方というものなのだろうか？

「横向いちゃだめよ」

美容師のお兄さんが、私の顔を正面に戻した。

ストレートだった私の髪は巻き上げられ、パーマ液をかけられている。

校則が緩いうちの学校は、派手にしなければ、パーマもカラーよがも咎められない。

「これでどうかしら？」
数時間後、美容師のお兄さんがプリツとお尻を突き出してそう言ったときには、私は別人になっていた。

短めの前髪にくせ毛っぽいフワフワパーマ、というキュートなスタイルが、栗色の髪とあいまって、私の地味な顔を明るく見せている。

私って、ちょっと可愛い？ そう思ってしまった。

「いいわ。さすがね」

永嶋祐美は褒めると、「これで払うわ」とレジの人に、カードを渡した。

「あ、あの。私、払います」

慌てて財布を出そうとしたけれど、途中で千円札一枚しか入ってないことを思い出した。

結局、「私がそうしなかったの」と言う永嶋祐美に甘えることになってしまった。

「どうして、私にこんなことしてくれるの？」

お抱え運転手がハンドルを握る車の中で、永嶋祐美に思い切って聞いてみた。

「私は永嶋さんにとって邪魔な存在じゃ……？」

聞かないと今夜は眠れそうにない。

私の質問に謎めいた微笑を浮かべると、永嶋祐美は言った。

「恋っていうものは、障害があった方が燃えるものよ」

さっぱりわからない。

ただ、その謎めいた答えから、推測すると……

滝川優人と永嶋祐美は倦怠期に入ってる？

だから、私を使って二人の間に刺激を与えようとしているんだろうか？

そうすることで、付き合い始めた頃のトキメキを取り戻そうとしてるとか？

きっとそうに違いない。

夏休みに昼のメロドラマを欠かさず見ていた私は、そう結論づけた。

ただ、彼らの間に刺激を与えるには、私じゃ力不足だと思っけれど……

「彩ちゃん、イメチェンしたんだね。似合ってるよ」

滝川家に帰ると、早速、隼人君に褒められた。

「彩香さん、すごく可愛い！」

優香も絶賛してくれる。「優人もそう思うでしょ？」という言葉は、余計だったけど。

じっと私を観察していた滝川優人は、顔を逸らした。

「彩香、いつものとこで切ってきたのか？」

実験室から夕食を摂るために帰ってきた父が聞いた。

「クラスメイトの永嶋さんに、行きつけの美容院に連れていってもらったの」

私はそう言って、滝川優人の反応を盗み見た。

滝川優人は眉をひそめている。

やっぱり永嶋祐美と倦怠期なんだ。

滝川父が帰ってくる、私の髪の話は終わり、いつもの夕食が始まった。

でも隼人君だけは、その後もやたらと私の髪を触り、「絶対いいよ。これ」と言っていた。

それがなんだかちよつとだけ……ほんのちよつとだけ、気になった。

それから一週間後のことだった。

滝川優人から「話がある」と、メールで学校の屋上に呼び出されたのは――

四 タイムポッド

「アイツが未来から来たというのは本当だ」

これが滝川優人が屋上で、私に言った最初の言葉だった。

季節はもう秋で、屋上に吹く風は肌寒かった。

私は紺のブレザーにエンジ色のリボン、グレーのスカートという格好をしている。台形のスカ―

トは大きめのプリーツが入っていて可愛いけど、短いのが難点だ。素足に冷たい風がビュビュウと当たっている。

同じようなデザインでありながら、足元まで暖かそうな滝川優人が、今はうらやましかった。

「そう」

風で乱れる髪を押さえながら、私はようやく返事をした。

滝川優人が怪訝けげんそうに目を細める。

あつさりしすぎているのはわかっている。でも他に言い様がない。

優香の部屋から聞こえた会話の断片と、その夜を境に滝川優人が私を観察し始めたことから、彼が優香の話を感じたことはわかっていた。

しばらく沈黙が続いた。

「……で、私も信じると？」

耐えられなくなつて、先に沈黙を破つたのは私の方だった。

滝川優人の顔に、フツと勝ち誇つたような笑みが浮かぶ。

「そんなことに興味はない。お前が偽善者で、アイツを信じるふりをしていてだけで、実際は信じていないのはわかっている」

優香と同じ切れ長の目が、射抜くように私を見ていた。

一瞬、言葉を失った。

偽善者ですってえ？

ろくに言葉も交わしたことがない相手に、どうしてそんなこと言われなきゃいけないわけ？

「滝川君に人格批判をされる筋合いはないんだけど？」

私は腕を組むと、滝川優人を睨にらみつけた。

もう既にケンカ腰だ。

「ついでに言うなら、物事を深く考えることがなく、単純」

滝川優人は口の端を上げると、さらに私を馬鹿にした。

コイツ性格悪すぎ。人の欠点ばかり。しかもちよつと当たってるのが、悔しかったりする。

私は腸はわたが煮えくり返るのを感じた。

「それが私を観察した結果つてわけ？ そつちはどうなのよ？ その偽善者で単純な私と将来……」
結婚すると信じてる……

私も負けずに言い返すつもりだった。

でも、言おうとしている言葉の意味に気がつき、最後は言いよんどんてしまう。

それでも効果はあつたようで、滝川優人は忌々いまいましそうに眉をひそめた。

「……不慮の事故だ。きつとお前に葉を盛られたか、何かあつたはずだ」

失礼な。そんなことするわけじゃない。

「勝手に人を犯罪者扱いしないでよ。あなたの彼女と違って、私は堅気かたぎなんだから」

滝川優人は「彼女？」と聞き返した後、すぐに思い直したように、

「そんなことはどうでもいい」

と気まずい話題を終わらせた。

「用件は何？」

私もさつさと話を終わらせたかったので、それに乗る。

「今日、お前を呼んだのは——」

滝川優人が言葉を切った。

サラッとした前髪の下から、切れ長の目が、私をまっすぐに見つめる。

不覚にも私はドキッとしてしまった。

「未来を変えるためだ」

十

その夜、私は美晴と一緒に滝川家の近所にある公園を訪れた。

公園で、タイムポッドを使った初実験がおこなわれると聞いたからだ。

初めての実験とあって、「タイムマシンを創る会」のメンバーほぼ全員が公園に集まっている。

主役のタイムポッドは、砂場のご真ん中でスポットライトを浴び、いつもよりも異様さを増していた。

実験が成功したときのためにと、シャンパンまで用意してあるらしい。もうお祭り騒ぎだ。

「——私が未来で考え出した『ワームホールの解』に、誤差を収束させるアルゴリズムを組み入れ

たんですよ。この新しい方程式を『超ワームホールの解』と名付けましてね。数値シミュレーションをおこなったところ、理論値に間違いはない。それで、実験に踏み切ることになった次第で——」

滑り台の側で、父が滝川父と小夜子さんに説明している。

隼人君は部活で遅くなるらしい。滝川優人は……あんな奴のことは知らない。

「いまいちわからないので……ワームホールというのは、竜巻が突然発生するように、場所、時間共に不規則に発生するものと考えていいでしょうか？」

滝川父が難解な説明を理解しようとして、質問を投げかける。

「そうです。竜巻のように不規則に発生する自然現象です」

「では、ワームホールの解は、不規則なはずのワームホールが発生する時間、場所を予測する方程式で……？」

「ワームホールの解は、発生する時間、場所を予測し、さらにワームホールが繋がっている未来、もしくは過去の時点をも予測する方程式です。タイムポッドはワームホールを潜り抜けるための乗り物で、ワームホールが繋がっている過去、未来にしか行きません」

「どうも、そのメカニズムがわからないのですが」

「そうですね……。まず、タイムポッドは時空間にシロックを与え、歪みを生じさせます。歪みを利用してワームホールに入り込み、ワームホールが繋ぐ未来、過去へと向かうというわけです」

シヤロック・ホームズとワトソンの対話のように、父と滝川父の会話が進む。

そこへ、優香も加わった。

「優香が目標の年代より十年も前に来てしまったのは、ワームホールの解が間違っていたからだったの」

ようやく何かを掴んだように、滝川父が頷いた。
「超ワームホールの解で計算すると、優香がこの時代に到着したのは当然のことだったみたい」
難解な話を、優香が可愛く語る。

滝川父が頬を緩め、そうかそうかと優香の頭を撫でた。
うちの父もそうだけど、滝川父は優香を目に入れても痛くないほど可愛がっている。

「超ワームホールの解によると、今夜ここで生じるワームホールは、二ヶ月後の未来に繋がっている。今回は実験として亀を乗せて、タイムポッドを発進させます。亀を乗せたタイムポッドが、二ヶ月後に現れれば、実験は成功です。超ワームホールの解は、ほぼ正確だという結論になります」
父の退屈な説明を聞きながら、私は滝川優人の言葉を思い出した。

——アイツが現れるまで、俺とお前には接点がなかった。未来で本当に俺たちが結婚しているのなら、どこかできっかけがあったはずだ。それを避ければ未来は変わる。アイツからそのきっかけを聞き出せ。

滝川優人は私にそう言った。命令形で。

何様のつもり？ 思い出すと、また怒りが込み上げてくる。

「彩、何怖い顔してんの。携帯鳴ってるよ？」

美晴に肩をつつかれる。

ハッと我に返ると、誰からかも確かめず、慌てて携帯を取った。

『もしもし、彩ちゃん？ 隼人だけど』

意外な人物からの電話に、裏返った声で「隼人君!？」と叫んでしまう。
優香が不審そうに、私を見た。

『タイムポッドの実験どうなってる？ ちょっと気になっちゃってさ』

『まだ始まってないよ。スタートは五分後くらいかな？』

私は携帯を耳に当てながら、公園を出た。なぜか優香の目が気になったからだ。

『実験って、どんな感じ？ 想像もつかないんだけど』

「なんでもね、タイムポッドを二ヶ月後の未来に飛ばすんだって」

『へえー。すごいな』

「うん。本当にそれが実現したらね」

『……彩ちゃんも胡散臭いって思ってるんだ。実は俺も』

「やっぱり？ いくらなんでもタイムマシンはないよね」

隼人君と笑い合いながら、あてもなく公園の周囲を歩く。

いつもは忙しく車が行き交っている道路も、今夜は珍しく静かだ。秋の虫の音がかすかに聞こえる。自分の笑い声が妙に響いて、口を噤んだ。滝川優人の「偽善者」という言葉が、胸に蘇る。

「まだ部活？」

不自然な静けさをかき消すように、私は明るく聞いた。

『部活はとつくに終わってる。ダチにラーメン食いに誘われて、今帰るところ』
気のきいた返事ができずに、「そーなんだ」と私はありきたりな相槌を打つ。会話が途切れた。

『——毎日家で会うけど、電話で話すつてのもたまにはいいね』
「え……？」

隼人君にいきなり意味深なことを言われて、私は思わずドギマギした。

これはどう反応したらいいのだろう？ そう思った瞬間——

ワツと地を揺るがすような歓声が上がった。同時に、あたりを照らしていた明かりがフツと消え、真つ暗になる。私は公園を振り返った。

『何だ今の？ 何かあった？』

携帯を通して聞こえたらしく、隼人君も聞いてきた。

「——わからない。ちよつと様子見てくる。後でかけ直すね」

やけに胸騒ぎがして電話を切ると、私は公園へと走った。

途中、つまずきそうになりながら駆けつけると——

そこは狂喜に満ちていた。

月明かりの中で、男同士で抱き合う人、涙を流す人、ひたすら笑っている人など様々だった。

私は一人別世界に迷い込んだような気分で、立ち尽くす。

「彩っ、どこ行つてたのよ？ すごかったんだから。本当に……本当に消えたの」

興奮の場の中、美晴が息も絶え絶えに叫んだ。

私は砂場を見た。アレがない。砂が波紋を描いているだけで、アレがなかった。

つい先程まで異様な存在感を示していた、あのタイムポッドが——

それから三十分後。

興奮は収まらず、酔っ払って歌い出す人、踊り出す人、服を脱ぎ始める人まで出始めた。

あまりの騒ぎっぷりにお巡りさんが駆けつけ、その場は退散。

滝川家の実験室へと流れ、馬鹿騒ぎは明け方まで延々と続いた。

翌日。

「——で、空間がこう、ユラッて揺れたのよ。もうすごかったのなんのつて。何ていうか、今まで不変だと信じていた世界が根底から揺るがされた感じ？ そしたらタイムポッドがスツと消えて……奇跡だったよ」

先ほどから美晴が、タイムポッド体験を熱く語っている。

向かいに座つてその話を熱心に聞いているのは……

「俺も見たかったー！ 優人はそんな実験があるなんて、教えてくんなかったしさー。本当に友達なのかなって時々疑うよ。つたく」

なぜか高倉君だ。

私と美晴が実験の話をしていたところへ、急に高倉君が割り込んできたのだ。

伊達^{だて}なのか、今日は眼鏡をかけている。
「実は俺、ガキの頃、UFOを見たんだ」
いきなりそんな告白をし出すし、わけがわからない。こんなときでさえも、私は時折、窓際の滝川優人の席から、視線を感じていた。

二人の会話を聞きながら、私も昨夜の実験を思い返した。
確かに、タイムポッドは消えていた。

その瞬間を目撃したという美晴は、怪しい宗教の信者のように、タイムポッドの奇跡を信じ切っている。

私は——実はアレははじめから存在しなかったのかもしれないと疑っている。

砂場に置いてあるように見えただけで、もしかすると、特殊効果を使った3D映像だったのかもしれない。

私も小学生の頃は、タイムマシンを創るという父の言葉をそのまま信じていた。

作文大会で、タイムトラベルをして、人々を事故や災害から救うヒーローになるという将来の夢を書いて、入選したこともある。

でも、そのせいでいじめられるようになり、見かねた担任の先生に「タイムマシンは素敵^{すてき}だけど、そんな実現しないものを、実現するように言うのは良くないわ」と否定されたとき、私は現実を理解した。

それ以来、私はタイムマシンを信じていない。

「——優人はビジネスセンスが抜群でさー。中学んときに株を買いまくった某社が急成長を遂げたんだ。今でもその株をかなり保有してるし、自分の父親より金持ちかもな」

気が付くと話題は既に変わっていて、なぜか高倉君が私に話しかけていた。

「それにあのルックスじゃん？俺が所属しているモデル事務所からも誘われてるんだ。アイツはプライドの塊みたいな奴だから、モデルはできないと思うけどね」

そう言っつて、高倉君が人差し指で眼鏡を押し上げる。

滝川優人がプライドの塊^{くわい}だというのはわかる。

タイムポッドという変なことに関わっていることも、普通すぎる私と関わっていることも、プライドが高い彼には許せないのだろう。

私はイメチェンをしてちよつとは可愛くなったとはいえ、普通に可愛いだけで、やっぱり普通の域は出ない。永嶋祐美というスーパーマンのような彼女がいる滝川優人が、私と関わりたくないという気持ちはよくわかる。

けど、あんなヤツはこつちもお断りだ。それより——

「なんでそんな話を、私にしてるの？」

「——さあ」

高倉君はニヤリと笑うと、滝川優人をチラッと見て、自分の席に戻っていった。